



Title	書物と人
Author(s)	片山, 忠雄
Citation	大阪外大英米研究. 1961, 2, p. 66-85
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98932
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書 物 と 人

Nihil humani et libri alienum.

片 山 忠 雄

〔 Ⅰ 〕

THE UNIVERSAL ETYMOLOGICAL ENGLISH DICTIONARY

BY

NATHAN BAILEY

本格的な蒐書となると、運鈍根ならぬ運根金の三拍子が揃ってはじめて可能なことは今更言挙げするまでもないことだ。しんがりに控えているのが実は「先立つ」ものだから、この順序は逆にすべきものかも知れない。ロンドンで古本漁りをした時も、金のかゝる一流どころは始めから敬遠して、三四流どころを狙い専ら運と根気を頼みの綱とした。幸運の女神がほゝえみかけてくれたら、1594年版の *Venus and Adonis*, いやそこまではゆかなくとも Dickens の *Is She His Wife?* くらいのところはロンドン土産として持ち帰れたかもしれないが、残念ながら2シル均一本の中から掴みだした三、四冊が根気の報酬として残っただけである。THE UNIVERSAL ETYMOLOGICAL ENGLISH DICTIONARY, Vol. II, By N. BAILEY (1731)* もその一つである。これは C. L. Wrenn によれば、英語辞書発達史上第四段階に属するものである。即ち第一期の辞典は「特に説明を必要とする稀語」を収録した“glossary”, 第二期は「難語」あるいは外国語に起原をもつ単語を対象としたもので、Thomas Cooper の *Thesaurus Linguae Romanae et Britannica* (1565)

* 初版は AN UNIVERSAL……となっている。なお市河三喜博士の蔵書目録をみると、1733年の第6版、1745年の第11版等数部記載されているが、いずれも大正12年の関東大震災の折他の1820年以前刊行の稀本と共に焼失したという。私の手に入れた1731年本は再版である。

や、Robert Cawdrey の *A Table of Alphabetical English Words* (1604) がその代表者である。第三の段階になるとこれに「語源」の説明が付加されるようになったという。Stephen Skinner の *Etymologicon Linguae Anglicanae* (1667) はその一つである。第四の段階にいたって始めて辞典らしい姿を具備してくる。即ち文語の全部を包含しようとする試みである。その先駆者は John Kersey が 1708 年に出版した *Dictionerium Anglo-Britannicum* 一名 *A General English Dictionary* である。Bailey のはこれ等先蹤の後をうけてさらに一步を進めようとしたものであった。即ち本辞典は Bailey 自身の言葉を引用すれば、*"A work useful for such as would Understand what they Read and Hear, Speak what they Mean, and write true ENGLISH"* たらんとする抱負をもって編まれた労作なのである。初版を 1721 年に世に送って以来 1802 年までに版を重ねること十三度に及んでいるのはその人気を物語っているものといえよう。Keats も一本を蔵していたというが、あの *Marvellous Boy* が *Rowley Poems* にちりばめた語を採りだす種本の一つとして利用したものこの辞典であった。有名な Dr. Johnson の 1755 年版の辞書の基礎になったものでもあるが、おなじ *"one-man dictionary"* でも Johnson のそのように編者の体臭がぶんぶん匂ってくる個所もあるような魅力はない代りに、どの頁を開いても十八世紀の匂がしてくる本である。今日では引く辞書というより寧ろ読んで楽しむ辞書というべきであろう。

その特色としては、語源の説明の外に五百以上の図版が言葉だけの説明では分りにくい語の理解を助けていること、エジプト、ギリシア、ローマの神話に関する豊富な記述からも窺えるように事典的要素も加味されていること等である。なお英語の発音全般に関して著者の Bailey がどのような意見をもっていたかは Dr. Johnson の場合のように明言していないので知ることができないのは残念である。ただ alphabet の項には各文字の発音又は文字と綴字との関係について簡単な説明がついている。一二の例をあげると次のようなものがある。S, is lost and may be term'd a liquid, in the words Isle, Island,

Viscount. S sounds like Z in Chaise, Praise etc. and Z like S in raze. この最後の例は〔reiz〕即ち unvoiced z の現象をさしたものである。T with an i generally sounds like si before a vowel as in Action, Creation, Inclination. これは si or sj>ʃ という “historical assimilation” 以前の発音を示しているものである。アクセントは音節の後につけてあるが、Preface に as many Persons of a small Share of Literature and not very conversant in Books, are frequently apt to Accent Words wrong ; especially those that are Technical, and such as are not the most common, I have placed an Accent on that Syllable, on which the Stress of the Voice should be laid in pronouncing とことわっているのは アクセントは一つには詩の metre によって確かめられていたことを示しているであろう。ギリシア語起原のものについては必ずしも元のアクセントを墨守しないのは、そうすることはイギリス人には耳ざわりな場合があり、英語の「ことだま」にそぐわぬ結果をまねくおそれのあることをその理由としている。

さてそのアクセントについてみると、大体现行のものと大差ないが、A'cademy, hen-pe'cked, ave'nue 等のような例も散見する。ave'nue は N. E. D. によると occas. in 18th C. となっている。

次に語源をのぞいてみると、なにしろ近代言語学発達以前のことであるから、借入語の場合英語に入ってきた直接の源泉の調査が行届いていなかったり、溯源が不十分であったり、説明に眉唾ものと考えられるものが交っていたりするのはやむを得ないことである。たとえば candid は恐らく直接の借入先はフランスであろうが, candidus, L. となっており, savage は un sauvage F. でとどまっている。dirge は Latin の dirige に由来するものだが, Bailey は as some say, of *dyrken*, Teutonic to praise ととんでもない方向に「導」いている。しかしこれは神ならぬ人間の場合にはやむを得ぬことであろう。saunter になると, prob. of *sancta terra*, L. i. e the holy-land, because in ancient times, when there were frequent expeditions to the holy-land,

many idle persons sauntered about from place to place, under pretence that they had taken the cross upon them, or intended so to do and go thither
となっていて、こうなると「うお」というのは「うろこ」と「お」があるからだというこじつけと同類で、folk-etymology である。この例は相当多い。とにかく Dr. Johnson 等も peacock* は peackcock, from the tuft of feathers on its head などとこじつけをしていた頃なので語源が弱いのは仕方がないことだろう。

最後に語の説明をいくつか拾ってみよう。

words は distinct, articulate sounds agreed on by men to convey their thoughts and sentiments by でかたづけられていて、書かれたり、印刷された場合の説明をかいている。また language は tongue or speech, a set of words upon which a particular nation or people are agreed to make use of to express their thoughts と定義され、「国語」の意味だけしか認めていない。当時としては、ことに単独では難事であったことは認めなければならないが、N. E. D. によると、word は18世紀には既に大項目12、さらに細別すると30項目に及ぶ意義をもっていたことを思うと、昔しの辞書がいかに不完全なものであったかということ、今日の辞書、特に N. E. D. のように完備したものは Cawdrey の辞書を acorn とすれば oak にあたるものだという比喩が決して誇張でないことを痛感せざるを得ない。Cawdrey を acorn とすれば Bailey はそれが根をおろし、新芽を地上にだした sapling というところであろう。言語に関連した今一つの語をあげると、dentals は such letters** in pronouncing which the teeth are absolutely necessary, are by

* Bailey は Latin の *pava* にさかのぼって説明している。

**音と文字が専門の学者の間でも区別されていなかったことは、次の H. C. Wyld から引用からも窺える。He (Charles Cooper, the author of *Grammatica Anglicana*, 1685) distinguishes, as none of his predecessors except Wallis (the author of *Grammatica Linguae Anglicana*, 1653) do between sound and letter. (*A History of Modern Colloquial English*, P. 171)

Grammarians so called とでている。N. E. D. によると、この語の名詞用法は1794年初出となっているが、それ以前のものが Bailey によって確認される訳である。blood を引いてみると、説明の後半部に by microscopes the blood appears to consist of little red globules swimming in aqueous liquor, supposed to be *crusor* and *serum* となっていて、さすが William Harvey の国だと感心させられるが、rain は The difference between Dew and Rain seems chiefly to be this, that Dew falls at some particular times, and in very small drops, so as to be seen when it is down, but is scarce perceivable while falling; whereas Rain is grosser, and falls at any time. という具合で、イギリスでも18世紀の初め頃には、露はまだ雨の同類で天から「ふって」いたことがわかる。20世紀の今日でも Loch Ness Monster の噂を信じている人もあるのだから、18世紀人の輕信を笑うわけにはゆくまいが、mermaid は実在するような口振りで説明してある。もっとも場所は Congo のさる川となっている。Dutch の説明には They rob God of his honour. The fish of their quarters ……などと書きつらね、Because they tolerate all religions. Because they have taken in part of the sea in making their towns, by strong banks, etc. とへらず口をたたいているのは、Dutch auction や Dutch courage を生みだした背景にその原因をもっているであろう。日本語起原のものでは moxa が一つだけ収録されているが、語原の説明はなく、a sort of down or Indian grass, used in physick となっているところを見ると、天竺わたりと考えられていたらしい。

最後に日本語、Bailey では Ja'ponne'se Language に関する説明を紹介しておこう。

the language of Japan is said to be very curious, they having several words to explain one thing, some in honour, others in derision; some for the prince, others for the people; as also for the speaker and person spoken この種本は遠く Rodrigues にでも遡るので

もあろうか。今日日本は民主国家になったといわれているが、democracyの国の人の眼に「珍奇」な特色としてうつったこの言語現象が整理されたとき我国に democracy が確立したといえるではあるまいか。

この辞書を通覧して感じることは、Stepney の下宿屋の主人であったという以外には殆んど伝記の明らかでない Nathan Bailey という人物は、Dr. Johnson のように、lexicographer (a writer of dictionaries, a harmless drudge, that busies himself in tracing the original, and detailing the signification of words) というよりも自から巻頭に名乗っているように、philologist 即ち Bailey の定義によれば a lover of letters or languages, a humanist という印象が強いということである。



GEORGE GISSING

British Museum の正門を出て南へものの三、四分も歩くと New Oxford Street にでる。ここの 27 番地に Walter T. Spencer という 古本屋がある。暖簾の古い老舗で、Dickens の初版物など 稀覯本の専門店であるが、今では “No browsing because of lack of space.” という冷たい貼紙一枚が貧乏人をしめ出している。今ではというのはこの先代は中々の苦勞人で、 “Those whom chance and circumstance have deprived of the perilous privilege of a cheque-book are, none the less, as warmly welcomed as are individuals whose purses are heavier than hearts.” という大通ぶりで貧富を問わず門戸を開放していたからだ。上文は *Forty Years In My Bookshop* という思い出の記にでているものだが、この本はアメリカの同業者 Rosenbach の *Books And Bidders* のように金に糸目をつけずに買いまくって ロンドンの古本市場では “競売場の恐怖” という異名をとり、生涯蒐書に費した金額は恐らく一億ドルを下るまいといわれている人の記録のように稀書中心の面白味はないが、19世紀の大政治家や文豪たちが出入りした店の主人の回顧録だけあ

って、書物と人のつながりを語って特色ある読物になっている。文学者の中では Pater, Stevenson, Richard Jefferies 等の逸話もそれぞれの 人柄をよく つたえているがとりわけ我々の心に 深い印象を残すのは Gissing に関するものである。Spencer はこう書いている。

I knew George Gissing himself very well. He spent many an hour browsing among my books, or talking about them, between the years 1883 and 1885. He lived quite near to my shop in Bogiers Court, then lying off the Tottenham Court Road, but now demolished. He always seemed to be lingering about New Oxford Street. In those days my shop did not close until ten o'clock, and Gissing was always the last to depart.

He never appeared to be able to buy books for himself. He looked very shabby, with a quiet, depressed air. He was slimly built and youthful-mannered, though he was not given to smiling much, as though all the trouble of the world had concentrated on him and deprived him of the gift of turning up the corners of his mouth.

笑いを忘れ、天下の憂いを一身にあつめたような 顔付に Gissing を追いやっていた苦悩の原因はどこにあったのであろう。まず理想と現実の乖離があった。これは勿論世の習いとはいえ、Gissing 場合そのへだたりは余りに大きかった。社交を嫌い、その愛読書の一節を引用すれば、部屋の片隅にしりぞいて一巻の書物を友としてつくる “A world within the world” の中にこころを平静に保ち、独立と隠遁を楽しむ “hermit-scholar” となるのが恐らく Gissing の理想であった。しかるに現実には貧困故に “A class of brute beasts” と蔑視する階級の中に D. H. Lawrence が “starver” と呼んだようなみじめな暮しを余儀なくされたのであった。その外に不幸な家庭生活があった。彼の最初の妻は処女作 *Workers in the Dawn* の主人公 Arthur Golding の伴侶のように飲んだくれの悪妻であった。1883年には二人は別居している。Gissing が同居生活に堪えられなくなったという説と、妻のほうで勝手にとびだしたのだと

いう説がある。*Private Papers* にえがいた優しい、物静かな、秩序と平和を愛する家政婦は 彼が現実の生活には 見出し得なかった 理想の女性像なのである。今一つ彼の心底に蟠踞して不断の憂愁の原因となっていたものに呪うべき過去の汚点があった。 作品の中に 自分の生活の 殆んどあらゆる 面を “write off” した Gissing もこの旧悪にふれ得なかったのはこの問題に対する彼の恐れを物語るものであろう。

私は今 *Private Papers* から引用し、 その中に書かれている Ryecroft の感想の一部が作者 Gissing の本心や回想であり、 またあるものは実現し得なかった希望の表現であると言いた。その根拠は *Private Papers* を世に問うた 1093年に彼の書いた手紙に基づいている。彼は告白している。“Many of the Ryecroft reminiscences are my own, but much of the book is imagination ……One puts into literary form hopes which are not very likely to be realized.” 事実 *Private Papers* 一編は題辞の “Hoc erat in votis” を経とし、これに現在の心境と過去の思い出を緯として配したもので、彼がこの随筆を “curious blending of truth and fiction” と呼んだ時、同じ事実と言及していたに違いない。*

今この随筆の中で読書人としての彼の姿に焦点をあわせてみれば、僅か6 ペンスの *Tibullus* を買い求めた結果、水とパンで餓をしのぐ Ryecroft をえがいた箇所を含む春の部12章から15章までは “reminiscences” であり、17 章で古本屋の目録の中で 買えそうな 書物 に 印をつけて いる Ryecroft の描写は “aspiration” にあたるのであろう。

私はロンドンの古本屋でこの本の初版を買い求めることが出来た。下宿の孤燈のもとで頁をくりながら、私は Gissing がPreface で Ryecroft の死**につ

* 従って it represents Gissing's own aspirations という *Oxford Companion to English Literature* の説明は “Hoc erat in votis” にとらわれすぎた見解というべきであろう。

**Spencer 所有の草稿では、Ryecroft は出こうたれて死んでいたのを村人達に発見されたことになっているという。

いて語っている個所と著者が死に臨んで発したという言葉とを思い合せて、涙なきを得なかった。そして秋の部12章に述べられている死生観は、「実現し得ざる希望」ではなく、その本心の吐露であったことを私の愛読する著者の為に祈ったことであった。

〔Ⅲ〕

CATALOGUE NO. C 45 i 7

その本が British Museum にあることを知ったのは滞英日数ものこり少くなった6月下旬のある日のことだった。偶然古本屋の店先で立読みしていた本の中からその記事が私の眼の中に飛びこんできたのだ。まだ閲覧券を返却していなかったのは幸いであった。奥まった North Library であのずっしりと重い本を抱きかゝえてみるまでの待時間がこんなにながく感じられたことはこれまででなかったことだ。C45 i 7 というのは Lamb の旧蔵本 Beaumont と Fletcher の戯曲集の Catalogue No. なのである。*Old China* の中で Bridget の名で登場してくる姉の Mary が述懐している。

Do you remember the brown suit, which you made to hang upon you, till all your friends cried shame upon you, it grew so thread-bare—and all because of that folio Beaumont and Fletcher, which you dragged home late at night from Barker's in Covent-Garden ? Do you remember how we eyed it for weeks before we could make up our minds to the purchase, and had not come to a determination till it was near ten o'clock of the Saturday night, when you set off from Islington, fearing you should be too late—and when the old book-seller with some grumbling opened his shop, and by the twinkling taper (for he was setting bedwards) lighted out the relic from his dusty treasures—and when you lugged it home, wishing it were twice as cumbersome—and when you presented it to me—and when we were exploring the perfectness of it (*collating* you called it)—and while I was repairing some of the loose leaves

with paste which your patience would not suffer to be left till day-break—was there no pleasure in being a poor man? or can those neat black clothes which you wear now, and are so careful to keep brushed, since we have become rich and finical, give you half the honest vanity, with which you flaunted it about in that over-worn suit—your old corbeau—for four or five weeks longer than you should have done, to pacify your conscience for the mighty sum of fifteen—or sixteen shillings was it? —a great affair we thought it then—which you had lavished on the old folio. Now you can afford to buy any book that pleases you, but I do not see that you ever bring me home any nice old purchases now.*

Barker というのはもと Covent Garden と Drury Lane Theatre の間にあって、Elizabeth 女王の御代から 1665 年まで King's Printer をつとめたという由緒ある老舗である。そして folio というのは *Beaumont (F.) and John Fletcher. Fifty Comedies and Tragedies. All in one Volume. Published by the Authors' Original Copies, the Songs to each Play being added. Second Edition. J. Macock for J. Martyn, Henry Herringham, Richard Marriat, 1679* のことである。Lamb は 1800 年 Pentonville の Chapel Street に寓居をかまえていた頃——上文では Islington になっている——この folio を手に入れたらしい。

この版の本文には相当多くのミスプリントがあり、それがいちいち克明に訂正されている。*Old China* の中で“collate”と書かれている作業の一部分を綿密につづけたものらしい。Lamb は他により正確な版を所有していたかもしれないが、I cannot read Beaumont and Fletcher but in folio. というかたい信念を持っていた。1808 年に世に問うた *Specimens of English Dramatic Poets* の編纂にはこの folio 本を使ったのである。Lamb と姉の Mary が

* 以上の個所は *London Magazine*, March, 1823 からの切抜が後に紹介する Sotheby の目録の下にはりつけてある。

copy すべきであると考えた個所は ×× の印を始めと終りにつけてある。そして “the writers had better never have written” と判断した行は、Lamb の手で “expunge” されている。*Specimens* に収めた J. Fletcher の *Faithful Shepherdess* につけた “explanatory head” には次の批評がみられる。Coarse words do but wound the ears: but a character of lewdness affronts the mind. Female lewdness at once shocks nature and morality. この言葉を裏書きするかのよう に *Faithful Shepherdess* には次のような削除をおこなっている。

Coupled with this dayes heat to move your bloud; *Maids must be fearful* ; sure you have not been washed white enough ; for yet I see a stain stick in your Liver, go and purge again.

(イタリック体の個所を除けば他は全部削除されている。その印に上記のように横線をほどこしている。)

1796年の Coleridge 宛の手紙の中に同封してあった sonnet の中にえがいたのが彼の理想の女性像* であったとすれば、上の批評は当然の帰結であろう。

Specimens の編纂に使った後 Lamb はこの folio 本を Martin Burney に贈与したらしい。彼は Captain J. Burney と Mrs. Battle's *Opinions on Whist* のモデルと見做されている Sarah Burney の息子であった。15才の頃から Lamb たちの寵愛を受けた この利発な少年は、古本屋の店先で *Clarissa* を二巻まで立ち読みし、“quaint poetess” こと Mary から I saw a boy with eager eye / Open a book upon a stall, / And read as he'd devour it all で始まる詩にうたわれた Martin B —— である。Southey が Coleridge におくった手紙には Martin Burney had excellent taste in

* A timid grace sits trembling in her Eye/As loth to meet the rudeness of men's sight, /Yet shedding a delicious lunar light, /That steep in kind oblivious ex'tacy/The care-craz'd mind, like some still melody.

books ; eschewd the showy and artificial, and looked into the sterling qualities of writing. と賞讃の辞をうけている。1853年に世を去っているが、晩年には性来の虚弱な体質と不幸な結婚にわざわざいされて影が薄かった様子である。彼の死後17年を経た1870年3月27日に、この folio は Sotheby—1744年に創設され今日なお存続している書画骨董の競売商——で他の folio 本五冊とこみで8シル6ペンス*という捨て値で Lincoln's Inn の John Washer なる人に落札されたようだ。Washer 氏自身この本の見返しに書き記した言葉によると、It was in a desperately battered state, and rebacking was absolutely necessary for its preservation. とのことであるから、この本も Lamb の他の蔵書の御多分に洩れず “ragged veteran” であったに相違ない。それにしても50年前 Lamb が「大枚」15シルか 16ルシを投じたというこの手沢本、S. T. C. の興味深い書き込みも入っているこの “association copy” を含む六冊の folio 本 ** が8シル6ペンスとは一体どうした訳であろう。勿論 “association copy” などというものが珍重されるようになったのは古書熱の比較的盛んになった19世紀初頭から遙か後のことであった。盛んといっても古書は今日とは比較にならない安値で Masfield によれば、たとえば *Rambler* や *Spectator* の揃いもの、Pope の全集等 calf の美装本が一冊1ペニーあるいはそれ以下でよりどりであったという。また少し古い話であるが、1785年に Dr. Johnson の蔵書が競売されたときなどは、Shakespeare の first folio を含む貴重図書凡そ三千冊が242ポンド9シルで、一冊平均僅か 19ペンスという情ない状態であった。とにかくこの本の場合、売手は Lamb の旧蔵本であることに気づかず、あるいはその価値を知らずに市場に出し、買手もそれとしらず無競争で Washer 氏に落札されたものとしか受取れない。これは Washer 氏が

* 同じ版で Richard Le Gallienne の旧蔵本が Bournemouth の Alan G. Thomas という古書肆の1960年の目録6号に25ポンドで提供されている。

** E. C. Johnson が *Lamb Always Elia* の中でこの本文で8シル6ペンスであったように書いているのは誤りである。

残しておいた Sotheby の目録からも 窺えることだ。^{*} それと知らずしてこれを我物とした Washer 氏の感激はいかほどであったであろう。しかし Washer 氏は This was Charles Lamb's copy of Beaumont and Fletcher from which he made the selections for his *Specimens of English Dramatic Poets*. とのみ述べて多くを語っていないのを残念に思うのは私だけの感傷であろうか。Washer 氏に買いとられてから 7 年後 1877 年にこの本は British Museum の所蔵に帰したのである。Lamb の旧蔵本の多くが女婿の Moxon の手にわたり、^{**} その後大西洋を越えてアメリカの蔵書家の書庫深く姿をけしかいま見ることさへゆるされぬ今日、この一本だけは Lamb の愛した町にとどまり、"wishing it were twice as cumbersome" の感慨を 実感させてくれるのは愛書家にとって有難いことだ。Lamb が *Specimens* の冒頭に書き残した言葉 More than a third part of the following specimens are from plays which are to be found only in the British Museum, and in some scarce private libraries. The rest are from Dodsley's and Hawkins's collections, and the works of Jonson, Beaumont and Fletcher, and Massinger. と読み合わせるとき、この folio 本は遂におさまるべき場所におちついたというべきであろう。

〔IV〕

HARDY AND "DESPERATE REMEDIES"

ロンドンの古本屋の店先には "Remainders" というのがよく見受けられる。目録には "Books offered at greatly reduced prices." とかいう名で出ている代物である。その瓦礫の中に交っていた珠玉のうちでも断然異彩を放っているのは恐らく Fitz Gerald 訳の *Rubíiyát* であろう。当時は Leicester

^{*} 1076 Beaumont (F) and J. Fletcher, *Comedies and Tragedies, Imperfect*, 1679; and others 6vols.

^{**} この間の経緯に関しては E.C. Johnson: *Lamb Always Elia* の中に詳しく述べられている。

Square の Castle Street にあった Bernard Quaritch の店頭にこの不朽の名訳の中二百十部が一冊 5 シルの定価をつけて売り出されたのは 1859 年の秋であった。Swinburne, Rossetti 等に見出されるまではただ一人の買い手もつかぬまゝに、次第に値引され遂に一冊 1 ペニーで “remainder box” の中に投げこまれ、塵と埃にまみれてねむっていたのは余りにも有名な語種である。

1959 年 Quaritch は出版百年を記念して *Rub 'iyāt* の在庫目録をだしている。初版と再版に *Salaman and Absal* の訳を合巻したものに 250 ポンドの値がついている。Fitz Gerald 研究家 A. J. Arberry 教授が “the price seems to be very reasonable” といっているのは数年前 Swinburne の note のついた初版本が 9000 ドルで取引された記録が残っているからであろう。また Andrew Lang が *Library* の中で紹介している話では、あるロンドンの古本屋は Keats の *Endymion* の初版を一冊 4 ペニーで “remainders” として引取ったという。remainders という、うずたかい瓦礫の中に大隠のように静かに身をかくしている珠玉を見出すことが至難であるのは、珠玉が稀であるばかりでなく、我々自身の眼光のにぶさからもくるのであろう。我々は、大抵 remainder が reminder になってから、あわてたり、後悔したりするのである。

ところが Hardy の処女作なども同じ運命をたどったことは案外知られていないようだ。^{*} この *Desperate Remedies* の初版が Hampstead の Charles Rare Books という本屋の最近の目録に 35 ポンドででている。Hardy's first book, published anonymously, and very scarce. A copy in original cloth would today cost 3 or 4 times the price at which we are offering the copy above. という注つきである。

^{*} Lionel Johnson の名著 *The Art of Thomas Hardy* に John Lane がつけた Bibliography には冊数もなにも記載されていない。Blunden 教授の *Thomas Hardy* には Hardy did not continue the attempt at the sensational which had not saved *Desperate Remedies* from being sold off cheap……と記されている。

この本を世に問う前の Hardy はときの文壇にも出版界にも一人の知己さえ持たぬ無名作家であった。しかしこの青年作家は一流の出版書肆 Macmillan に目をつけていた。結局原稿は破りすてられて目の目を見なかった *The Poor Man and the Lady* という作品も Macmillan に送られたものであった。第二作 *Desperate Remedies* も1870年3月5日再び同じ出版者の許に届けられた。当時 Macmillan の reader であった John Morley は著者の創意と構成の才能や文体の優秀さを認めはしたが、若い娘が夜会で凌辱され、その結果相手の種を宿すなどというひんしゆくすべき事件が中心になっている小説はとうてい我慢のならぬ代物だと考え、“Don't touch this.” と主人の Alexander Macmillan に勧告したのであった。結果如何にと待ちわびる Hardy の許に拒絶の返信が届けられたのは草稿を送り出して一ヶ月たった4月5日のことであった。Hardy は、やむを得ず三流の出版業者 Tinsley に交渉し、翌1871年に75ポンド前渡ししてようやく五百部の初刷りをみることができたのである。ところがそのうち三百七十部しか捌けなかったというあわれな状態で、Hardy は25ポンドの損失をこうむったという。以上は *The House of Macmillan* (1843—1943) という同社百年間の出版業史の記録の中に著者 Charles Morgan が明らかにしているところであるが、W. T. Spencer の *Forty Years in My Bookshop* には一段と惨めな実状が暴露されている。

Hardy の最初の三作 *Desperate Remedies*, *Under the Greenwood Tree*, *A Pair of Blue Eyes* は1871年以降相ついで Tinsley から出版されたが、売行きは一向にはかばかしくなかった。Tinsley が Spencer に暴露したところでは、三冊とも五百部づつ印刷し、まず小手定めに五十部を製本して売り出したのであるが、二十部とはけなかったという。止むを得ず四百五十部は未綴のまゝ “barrow-man” に一括して払下げ、Jackson's Road の片隅で、土曜日の暮れ方わびしいナフサ燈のもとであたら名作も二東三文でたたき売られる悲運に遭遇するにいたったというのである。この有様を目のあたりに見たこのとある Spencer はこう書いている。

The barrow-man bound up the three-volume Hardy books* in his own particular way—with thick brown paper, making a one-volume affair of them, and there they lay on his stall, jewels among the heaped-up dross. “Now my intellectual friends,” his hoarse voice shouted out to the working folk passing by the stall, “here’s a three-volume novel published at one pound eleven and six—Mark that, one pound eleven and six, and you can have it to-night for fifteen pence !

Tinsley が Hardy の気に入りの小説は *Far From the Madding Crowd* だったが自分の店からだした三冊もこの題にしたほうがよかったと皮肉ったのは四冊目が Smith, Elder & Co. から出版され成功したのを妬んだからだと言っているわけにはゆくまい。以上に明らかであるように Morgan と Tinsley の言葉には食い違いがある。Morgan は恐らく Florence Emily Hardy : *The Early Life of Thomas Hardy, 1840—1891* に依拠したものであろう。これは Hardy の語ったものに基づいているので、結局 Hardy 晩年の記憶がおぼろになっていたか、それとも Tinsley が故意に事実を歪曲したかである。Hardy 自身の記憶も *Under the Greenwood Tree* をめぐる A. Macmillan との書簡のやりとりに関するものに照らしても明らかなように絶対正確とはいえず、難しくなっていたと思われるふしがあるし、たたき売りを目撃した Spencer の証言は信頼できるものであるから、かりに Tinsley の言葉を信用するならば Hardy の初期の小説三冊の初版は五十部の限定版と “remainder” 四百五十部ということになる筈だ。上記の目録に rebound と注してあるのもばらで投売されたものをとじ直したものかもしれない。元の装釘本が百ポンド以上の高値をよんでいるのもうなずける話だ。小説家としての名声の確立しない前の Hardy は世間の批評に対して極度に敏感だったようだ。匿名で出版された

* 三巻のうち *Under The Greenwood Tree* だけは二冊本で、あとの二巻は所謂 “three-decker” であった。

Desperate Remedies に対して *Spectator* 誌のくわえた “A nom-de-plume might, at some future time, disgrace the family name.” という酷評は「死んだほうがましだ」という気持をおこさせたという。Hardy がこの原稿を破りすてたのも彼の傷づいた感情がそうさせたのであろう。また *Under the Greenwood Tree* に対して Macmillan が示した反応は決して encouraging とはいえないが絶対に門戸をとぎしたものでなかった。それにもかゝらず Hardy は拒否されたものと思いこんだらしく、原稿の返却を求め再び Tinsley の門をたたいたのであった。この間の経緯について、夫人が Hardy received from them (Macmillan) a letter which, events having rendered him sensitive, he read to mean that the firm did not wish to have anything to do with his “*Rural Painting of the Dutch School.*” (*Under the Greenwood Tree* のこと) と書いているのは Hardy の当時の異常な神経過敏ぶりを物語るものである。

Dorchester に閉居してロンドンに顔出しすることも稀であったのは Hardy のためにもまた英文学のためにも幸いであつたのではないだろうか。彼自身この投売りの有様を目撃していたならば、彼の当時の心境では筆をおってしまったかもしれないし、従って *Tess* も *Jude* も *Dynasts* も 日の目をみなかつたかも知れないからである。

〔V〕

KILMARNOCK BURNS

ロンドンの古本屋めぐりをしている間に私が親しく手にとってみた書物のうちで一番値段の高かつたのは Burns の詩集 *Kilmarnock Edition* で、本屋は Chelsea の Harkness であった。この詩集は 1786 年に Kilmarnock の John Wilson が印刷刊行したもので、blue cloth 装釘の 8vo 版、正式の名称は *Poems, chiefly In the Scottish Dialect, by Robert Burns* となっている。六百部印刷されたうち三百五十部は予約者がついた。この予約出版の趣意書は

Burns が 1786 年 4 月 3 日に Aiken, 15 日に Ballantyne, 17 日に M 'Whinnie, 20 日に John Kennedy 宛の手紙の中に言及しているが、実物は Lesmahagow Kease の J. B. Greenshields なる人の手許に一部だけ残って 後は散佚してしまった。これがその写しである。

April 14th, 1786

Proposals For Publishing, By Subscription,
"Scottish Poems, By Robert Burns"

"The Work to be elegantly printed in one volume octavo. Price, stiched, Three Shillings. As the Author has not the most distant mercenary view in publishing, as soon as so many Subscribers appear as will defray the necessary expenses, the Work will be sent to the press.

" 'Set out the brunt side of your shin,
For pride in poet is nae sin;
Glory's the prize for which they rin,
And *Fame's* their joe :
And wha best blaws the horn shall
win---

And where for no' ?'

Allan Ramsay.

"We, undersubscribers engage to take the above-mentioned work, on the conditions specified : ---

Here follows Subscribers' Names in MS.

William Murray, one copy.

Geo. Howitson, one copy.

R. Thomson, 1 copy.

Colin M 'Dougall, one copy.

James Hall, one copy.

Charles Howitson, one copy.

Gavin Stewart, one copy.

William M'Call, one copy.

John Harting, one copie.

(Sent per Mr. Dun.)

Will. Johnston, 3 coppies.

Jas. Inglis, one copie.

William Templeton, one copy.

William Somer, *copy sent per*

Charles Crichton.—

John Boswell, one copy.

[*The Blockhead refused it.*]

Gavin Geddes, two copies.

John Mirry, two coppies.

copy, copie, coppies ととりどりの綴字をみると Lord Chesterfield の pedantic, polite spelling という言葉を想い出すが、William Somer の次にかゝれた *The Blockhead refused it.* という詩人の悪態は熱情家の面目躍如たるものがあるではないか。趣意書によれば「金もうけの所存は毛頭これなく」とあるが、実は Jean Armour との恋に破れた Burns が故国をすてて Jamaica へ渡る費用調達に選んだ方便であり、また既に切符まで買っていた Jamaica 行も出発の朝になって気が変ってとりやめた間かされても腹を立てるのは野暮というものだろう。

さてこの本の値段が3シルで三百五十部売れたとすると52ポンド10シルあがった勘定になる。刊行者の John Wilson は *Hic jacet wee Johnny* の中では For saul—he ne'er had ony と Burns に毒ずかれているが、実は紙も原価で提供し、組版印刷等も奉仕的に勉強し、六百部に対して僅か35ポンド17シル請求したという。すると Burns の懐には少くとも16ポンド13シル入ったわけだ。ところが事実 Burns は20ポンド受領したということだから、残り二百五十部も幾らかさばけていたことであろう。

もと3シルで売り出されたこの本も Burns の名声が高まるにつれて、市価はあがる一方で1898年には545ギニの高値をよんだと W. & R. Chambers版の序言で編者の William Wallace が驚嘆しているが、私が Harkness でみた本は950ポンドであり、アメリカのジェローム・カーン所蔵の Kilmarnock edition は4500ドルで落札されたという。今日では1909年にでた facsimile edition でさへ市価数千円をよんでいる。

しかし又一方では、この本が捨値で売られていた話もある。それは19世紀の

おわりのことで、J. T. Brown という博士がイギリスの北部で1シル6ペンスで掘りだしたものだ。私の乏しい蔵書の中にも Kilmarnock edition が一冊ある。といってもそれはこの町の James M'Kie という出版所からでた popular edition である。この古色蒼然たる詩集を大阪のさる古本屋で20円均一本の中からひろいあげ、Kilmarnock というとびらの活字が私の目の中に飛びこんできた時、私は心臓の高なるのをおぼえた。馬鹿げた話だと人は笑うであろう。然し1871年に Kilmarnock の町で祖国の生んだ最大の詩人への愛情をこめてつくられたこの本のとびらには W. A. Barclay, Kobe, Japan 1930という旧蔵者の署名のほかに、巻末に Andrew Barclay, Lallentine Hall, Cumberland というおそらく父親と思われる人の署名が消え残っている。Andrewさんの時代が1871年とすると、本物の Kilmarnock はそのお爺さんの時代になるだろう。すると日本へくるまでに四代受けつがれている筈だ。180才の老人で八重の潮路を越えてきたのであれば随分しわも深く日焼けもしていることだろう。でも……そんな他愛もない夢をえがきながら、私はロンドンで出くわした “Kilmarnock edition” に日本のどこかの古本屋の片隅でもう一度めぐりあう日を夢みている Christopherson のともがらである。